



病院理念
『患者さまの不安をとること』
当院の基本方針
「地域に根ざした安心できる医療」
「精神科医療の充実」
「老人医療」医療と福祉の結合

医療法人社団 光生会 平川病院

病院目標『時代が求める価値ある病院づくり』～ネットでつなごう医療の和～

[ホームページ] <http://www.hirakawa.or.jp/> [e-mail] hhsp1966@violin.ocn.ne.jp

成人期の発達障害に対する取り組み —発達障害専門プログラムの導入—

発達障害の認識の高まりと共に、成人期になって発達障害に向き合おうと医療機関を受診する方が急増しています。当院デイケアでは、成人期の自閉症スペクトラム障害(以下ASD)を対象としたデイケアプログラムを昨年から導入し、これまでに16名の方が参加されています。テキストには昭和大学付属烏山病院で開発された「大人の自閉症スペクトラムのためのコミュニケーション・トレーニング」を使用しています。

❖プログラムの様子

ASDには社会性の障害（相手の気持ちが読めない、場にあった行動がとれない）、コミュニケーションの障害（言葉の使用の誤り、会話をつなげない）、興味、活動等が限定していて反復・常図的（馴染んだパターンへの固執）といった特徴があります。プログラムでは上記の特徴を踏まえ、日常生活や職業生活の中で実際に困った場面を振り返ります。そして会話、頼む、断る、アサーション、自分の特徴を伝えるといったテーマで練習や話し合いを行います。また障害理解、感情のコントロール、ストレスマネジメントといった心理教育がテーマとなることもあります。ASDの特性から一人で苦悩することが多かったメンバーが、同様の体験をした他メンバーや専門スタッフと一緒に考えて、新たな解決策を探っていく過程はとても生き生きしたものであると感じます。

❖身体感覚の大切さ

上記の障害以外に、近年では感覚過敏や協調運動の障害についても知られるようになりました。プログラムでも蛍光灯の光が刺激になるので色の着いた眼鏡をしたり、他の人が気にならないような音が頭に響くので耳栓をしたりといった対処法や、異臭があるので懸命に訴えたが翌日近所の電線がショートしていたのが発見されるまで信じてもらえなかっただといった体験談が語られます。《次ページへ続く》



«前ページからの続き»

また友人関係が苦手な上に、球技で足をひっぱって仲間から外されていった苦い体験なども語られます。発達障害専門プログラムに参加しているメンバーが、ディケアの運動プログラムにチャレンジして自身の身体感覚に注意を向けて、対処法を講じたり、言葉で説明することに取り組んだりしています。

❖周囲の理解との相互作用

発達障害というと自閉的でマイペースといった印象があるかもしれません、プログラム参加者の言動からは周囲に気を使い適応しようとするけれど、ズレが生じてしまう苦悩の積み重ねが伝わってきます。そこで二次障害（精神症状）も起こってしまいます。最近、発達障害者の手記や、親御さんの生活における支援の工夫などが多数著書になっています。本人の努力と周囲の理解や適切な支援が相俟って、就学・就職など社会参加を可能にするのだと考えさせられています。本プログラムもその一助になれるよう努めていきたいと考えています。

地域生活支援科 ディケア 井出 学(公認心理師)

A2病棟を男女混合病棟にします

A2病棟は開設以来、男子病棟として20年以上に渡って運営してきました。当初は、アルコール依存症患者さんを男女混合病棟とすると、トラブルが発生するのではないかという懸念を吹き込まれていたため、男子だけの運営にしてきました。しかし、現在、女性のアルコール依存症患者さんは急性期に入院していただき、A2の断酒プログラムに参加するために、移動をお願いしていますが、環境として好ましいとは思えません。また、A2病棟は依存症以外にも、身体リハビリや合併症の患者さんも入院を受け入れているので、ここにも女性の大部屋のニーズがあります。今回、A2病棟の洗面所を女子トイレに改築しました。新たな挑戦になりますが、病棟スタッフも頑張ってくれそうです。どうか、ご期待ください。

院長 平川 淳一



【地域連携を支える人材育成】

「認知症について多職種で考える事例検討会」

認知症疾患医療センターの動き

東京都が定める「認知症疾患医療センターにおける人材育成の取り組み」の一環として、今年度から新たに‘各センターが所在する区市町村内の医療・介護従事者を対象にした、地域連携を支える人材育成に係る取り組み’が加わりました。

他方、みやま6月号の布村先生の記事にもありましたように、当センターでは昨夏より『認知症について多職種で考える事例検討会』を立ち上げました。おかげさまで毎回多くのご参加を得ながら、下欄の通り開催させていただいております。つまり、当センターとしては既にスタートさせていた地域での取り組みが、期せずして後からセンターとしての必須事業にあたることとなった訳ですが。実は、さらにそれよりも前から、当センター長でもある平川院長は、折に触れてはその必要性について述べていました。しかし研修企画担当である私をはじめとした関係スタッフは、「毎月開催」のミッションに、「最初こそ参加者は集まても、次第に減っていくのでは…」「はたして毎月発表や話題提供を募ることが可能な

のだろうか?!」と正直、及び腰だったのです。そんな中、平成29年度まで必須の研修事業であった『認知症多職種協働研修』が、翌30年度に‘独自の取り組みでも可’となったのを機に、ようやく覚悟(?)を決めて、この事例検討会を立ち上げるに至りました。

結果的には前述の通り、私たちの弱気な予想は良い意味で裏切られ、この1年毎月欠かすことなく会を開くことができています。これはひとえに当地域の医療・介護スタッフの方々の熱意とご協力の賜物に他なりません。今後も‘息長く’継続していきたいと考えておりますので、これまでにご参加くださっている皆さんはもちろんのこと、まだお見えになったことのない方も是非ご参加いただければ幸いです。そして認知症の人の医療や介護に携わる私たちや皆さんとの、本当の意味での‘顔の見える連携’の一助に、さらにはそれが認知症の人とその家族を支える地域づくりに繋がることを願っています。

南多摩医療圏 認知症疾患医療センター 研修企画担当

公認心理師・臨床心理士 淵上 奈緒子

【2019年6月3日開催の様子】



【左】筆者 【右】発表者「ぐらんぱぐらんま」の武井さん



内科病棟の取り組み～在宅につなげる看護～

看護師として入職してからあっという間に1年半が経ちます。1年前は点滴や与薬、処置、記録といった日々の業務をこなすことに必死でした。そんな私ですが、プリセプターや先輩看護師のご指導のもと、患者さんがしている治療の意味を考え、ゴールを意識したかわりを学び実践することで、とても成長できたと思います。技術面でも、先輩方にコツを教えていただきながら練習を重ね、自信を持ってできることが増えてきています。今は、病態のアセスメントに加え、ベッド周囲の環境、面会の家族への声掛けなど意識しながら日々看護をしています。また、受け持ち患者の看護や日々の業務、処置など1人立ちに伴う責任の重さを実感するとともに根拠や確認の大切さを痛感しています。次から次へと勉強することは尽きませんが、内科スタッフの皆様の力を借りながら充実した毎日を送っています。

内科では昨年から訪問診療を始めています。今年4月に河合医師が内科常勤医となってから土井医師が訪問診療に行く日が増え、訪問診療から入院になる患者さんもいます。現在、訪問診療を行う病院は増えています。その背景として、超高齢社会の中、最後まで住み慣れた土地で過ごすという地域包括ケアシステム構築が進み、在宅療養をする高齢者が増えていることが挙げられます。内科病棟で

は、在宅につなげるため、入院時から退院後を見据えたケアの提供、患者さんやご家族が自信を持って在宅で過ごせるような支援、患者さんの課題を明確にし、多職種へ情報提供することなど意識して取り組んでいます。私も2回訪問診療に同行し、生活者としての患者さんに会い自宅の様子を観察し、ご家族の話を聞きました。病棟看護師が実際に患者さんの自宅での様子を見ることは、退院支援にとても役立つと思います。今後も訪問診療に同行する機会があると思うので、そこで得た情報を病棟で共有したり看護計画に反映したりしていきたいです。



【右端】筆者

今後は、看護師として患者さんの全体像を考え、目標が達成できるよう関わっていきたいです。そして、患者さんやご家族が安心して入院生活を送れるような病棟作りに貢献できるよう努力していきます。

内科病棟 看護師 渡邊 しのぶ

高機能型X線CT装置を導入しています

検査科から

当院では昨年9月より、以前のCT装置と比べ高機能型であるキャノン社製16列マルチスライス型CT装置(Aquilion Lightning)へ更新して撮影を行っています。

今回はこの新しい16列CT装置によって、出来るようになったことをご紹介します。

1. CPU(画像処理機能の中心部)が新しくなり、画像再構成速度が速くデータ処理の時間が短縮したこと、画像の結果が速やかに報告できるようになりました。

2. 旧装置(4列CT)と比較して、検出器(X線を読み取り、画像にする部分)が4倍に増えたためその分撮影時間も短縮されて、患者様の息止め時間が短くなっています。

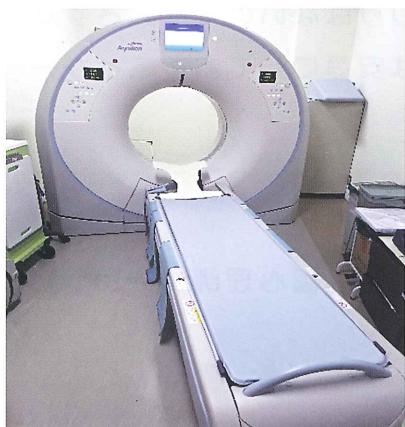
たとえば今まで、胸部CT撮影の場合30秒近く息止めをお願いしていましたが、現在は10秒以下で撮影を行えますので、患者様のご負担もだいぶ軽くなりました。

3. 手術による人工関節など、体内の金属のアーチファクト(障害陰影)を抑える画像再構成方法を用い、インプラントやスクリュー(金属の固定具)などの画像を見えづらくる影響を少なくすることで、画像の見えやすさが増しました。

4. 逐次近似再構成法というコンピュータの処理方法を用いていることで、X線を以前より少ない量で撮影できるようになりその結果、患者様のX線被ばくを減らすことができました。

5. 撮影台や開口部のサイズが大きく、患者様の圧迫感や恐怖感を減らすことができ加えて、全身の撮影も寝ている位置を大きく移動する事も無くなったので、患者様が安心して検査を受けられるように、やさしい装置の設計になりました。

今後も、画像診断に携わる医療スタッフとして「信頼・優しさ・安心」を基本に患者様に接するとともに、安全面を考えたX線装置を備えることで、皆様へより良い医療サービスの提供を行いたいと考えています。これからも、どうぞ宜しくお願ひ致します。



検査(放射線)科主任 診療放射線技師 中津川 強



こころの扉 その200

心と体は密接につながっている 一筆者、足の怪我から心身相関を学ぶー

みなさんこんにちは。私ごとですが、足を怪我しまして杖生活を送っています。歩けない、足はすぐ浮腫む、痛くて作業に集中できない、外出が厳しい等々に苦しみ、このままずっと治らないんじゃないかと悲観することがあります。始まりは足の怪我でしたが、今では気分や考え方にも影響しており、改めて、心と体の密接な繋がりを痛感しているところです。

前置きが長くなりましたが、『心身相関』という言葉はご存知でしょうか？読んで字のごとく、「心と体の状態がともに関わり合っている」という意味です。今日はこの『心身相関』についてお話しします。

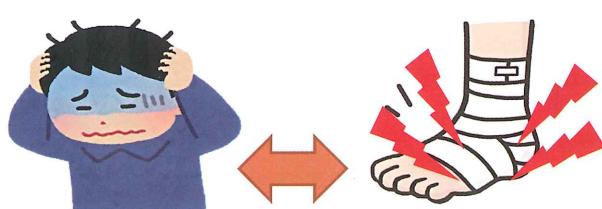
最近では某有名人がヘルニア術後の影響によるうつ病で休養するというニュースがありましたね。これは体の不調が心に影響しているものと捉えられます。あるいは、十分に休むことができず、過度なストレスが続いていることにより免疫機能が低下して寝込むことってありませんか？これは心の状態が体に影響しているのでしょうか。以上のように、体と心はともに影響しあっています。

人には、健康な状態を維持するために

一定の状態を保とうとする機能があります。これを『恒常性（ホメオスタシス）』と呼びます。すごく簡単に言うと、心身が一定の状態である、つまり恒常性が働いていれば特に問題はなく、多少乱れても恒常性が働いてなんとか乗り切ります。ただし、心か体どちらかの恒常性が崩れてうまく機能しないと、もう一方の恒常性も乱れていきます。そうなると、先述したような心や体の不調が出てきてしまいます。

恒常性が乱れてしまった時に効果的なものをいくつかご紹介します。たとえば緊張やストレスに対しては軽いストレッチや運動、深呼吸などが有効でしょう。ぜひ、試してみてください。ただし、今挙げた方法だけでは効果が現れにくい場合もあります。そのような場合は原因解決が有効になります。たとえば、睡眠や栄養不足には睡眠時間の確保や栄養の摂取が重要です。筆者もリラクゼーション等を試してみましたが、あまり悲観的な気持ちに変わりはないのです。さすがにこういう時は安静にしておくことが一番ですね。

心理療法科 公認心理師 内田 竜人



平成30年度地域生活支援科デイケア就労支援状況についての報告

平成29年4月号のみやまにて、デイケア就労状況について、報告しました。

今回は、平成31年3月時点での就労状況について、報告いたします。

精神科デイケア登録メンバーの就労及び社会復帰施設等利用状況(平成31年3月)

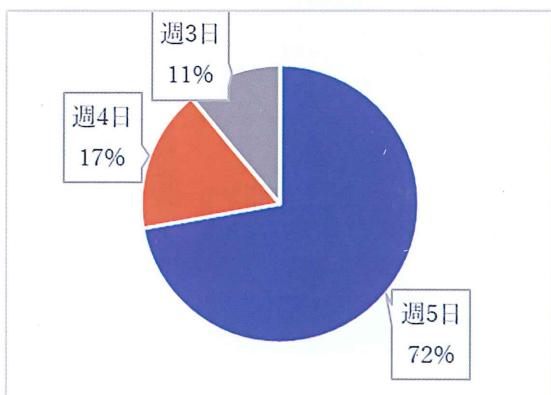
デイケア登録人数	95名	就労者男女比	14:5
就労人数(雇用契約の生じるもの)	19名(30年度新規9名)	年齢層	30代:1名 40代:12名 50代:6名
就労率	20.0%		
雇用形態	①障害者雇用 9名(30年度新規4名)		
就労内容	医療機関事務補助、工場内軽作業・製造、商業施設内販売、高齢者施設介護補助 ②一般就労 4名(30年度新規0名) 寮管理人、弁当配達、工場内製造など ③就労継続支援事業所A型 4名(30年度新規3名)※1 ④復職 2名(30年度新規2名)		
就労移行支援事業所、就労継続支援事業所B型等の利用者	①就労移行支援事業所 2名(30年度新規2名)※2 ②就労継続支援事業所B型 15名(30年度新規5名)※3 ③市役所ワークシェア事業 2名(30年度新規2名)		

※1 雇用契約に基づく就労機会が提供され、一般就労で必要な知識及び能力の向上を図る

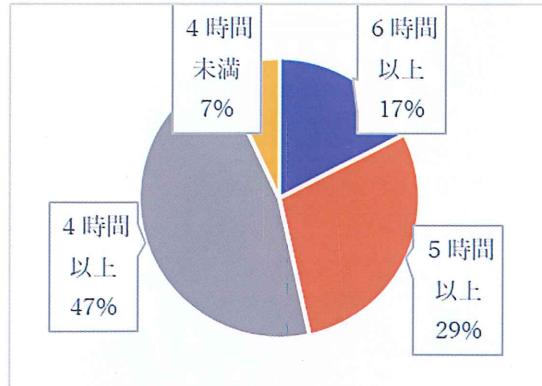
※2 作業・実習を通して、一般就労で必要な知識・能力の向上、適性に合った職場への就労を支援(非雇用)

※3 就労機会や生産活動が提供され、その知識及び能力の向上や維持を図る(非雇用)

<勤務日数>



<勤務時間>



当院デイケアでは障害者雇用による就職者が増加傾向にあります。障害者雇用は1週間で20時間以上の就労時間が求められます。そのため週5日で1日4時間以上、あるいは週4日で1日5時間以上という就労時間で働いているメンバーが多くなります。障害者雇用で働く準備を整えるために、同様のペースでデイケアに安定通所することや、デイケアプログラムに積極的に取り組むことが必要になります。そこで自身の症状・服薬の管理の仕方や日中の活動を維持するための休養の取り方を身につけて行きます。また平川病院ではアルコールデイケア、精神科デイケアのメンバーで就労意欲があつて職業準備性の整った方を看護部の協力の元、作業の切り出しを行い雇用する試みを行っています。今後もデイケアだけでなく、地域生活支援科全体の取り組みとして就労支援体制を充実させていきたいと考えております。

REPORT

令和初の納涼盆踊り大会開催！

令和元年8月7日水曜日に令和初となる盆踊り大会が今年も開催されました！参加された皆様、楽しんでいただけましたでしょうか？冷夏と予想された今年の夏は各地で連日35度超えの猛暑日を記録、熱中症者が続々と搬送されるニュースを聞き、準備中の私たちには気が気でない状況でした。そんな中でも作業療法室では当日に向けて、患者様と協力しながら灯籠制作や盆踊りの練習を行っていきました！皆様と集団を作り、1つの作業に取り組むことで過ぎ行く季節を感じ、当日への期待感を共感、あっという間に作業療法室は賑やかな雰囲気となりました。当日、皆様と作り上げた盆踊り大会は大成功！こうして笑顔で幕を閉じた令和初の盆踊り大会ですが、今年は灯籠を新たな装飾として取り入れ、恒例の行灯制作とは異なる作業で戸惑いを感じた患者様も多かったのかもしれません。しかし、完成した作品は各テーブルで皆様の手元をまた、退場の際には帰り道をやさしく照らし、会場に癒しを与えたかけがえのない作品となりました。素敵な作品をご制作頂き、ありがとうございます。盆踊り大会が開催することができたのも、皆様によるご協力のおかげだと感謝しております。誠にありがとうございました。



作業療法科 作業療法士 松丸 カトリーン



【左】美山町会の皆様と院長
【上】患者さまが制作した行燈

編集後記

今年は、秋の訪れが早いと思ったら9月の頭に猛暑に戻り、そして関東に台風が上陸、千葉県に大きな被害をもたらしました。台風の進路次第では、八王子もと思うと被害を受けた地域の1日も早い復興を願うばかりです。さて、9月は来年の東京五輪の前にラグビーW杯が開催されます。東京五輪のチケットをゲットし、ラグビーもと2ヶ月前にチケットを買おうと思ったら東京付近の会場は、ニュージーランド対ナミビア戦それも3万円のチケットのみ……人生最後のW杯と呟きながらやめておきました。初のベスト8を目指して頑張れニッポン！

医療法人社団光生会 平川病院

東京都八王子市美山町1076
電話 042-651-3131
FAX 042-651-3133

編集 平川病院 広報委員会

ご意見ご感想はこちらへお願いします
kouhou@hhsp1966.jp

**HIRAKAWA
HOSPITAL**